

海のいのち（立松和平）

宮坂 綾乃、堂前 汐里、中口 喬碩、西岡 笑美

一 作者と作品について

立松和平（本名、横松和夫）は、栃木県宇都宮市出身。栃木県立宇都宮高等学校卒業後、早稲田大学政治経済学部へ進学。早稲田キャンパス新聞会に入会するが政治的対立のため、除名。文章表現研究会に入会し、現代文学に親しむ。一九七〇年「自転車」で第一回早稲田文学新人賞を受賞。一九七九年に発表した「閉じる家」「村雨」で二度、芥川賞候補となる。翌年、『遠雷』で野間文芸新人賞を受賞し、二年後にはATGにより映画化される。一九九三年の『光の雨』で「盗作事件」を起こし、社会問題となるが、一九九七年、『毒』風聞・田中正造』で毎日出版文化賞受賞。二〇〇二年三月、歌舞伎座上演『道元の月』の台本を手がけ第三一回大谷竹次郎賞、二〇〇七年に『道元禅師』で第三五回泉鏡花文学賞を受賞した。行動派作家として知られ自然環境保護問題にも積極的に取り組み、小説のほか紀行文、絵本、戯曲、など純文学作家としては異例なほど著書が多い。

『海のいのち』は一九九六年に小学校六年生用の国語教科書に採用された。また『海のいのち』は絵本「山のいのち」「川のいのち」「田んぼのいのち」「街のいのち」などのいのちシリーズのひとつである。

二 叙述について

父もその父も、その先ずっと顔も知らない
父親たちが住んでいた海に、太一もまた住
んでいた。

この文章の前半から太一の父や祖父を
はじめ、代々男たちは漁をしに海に出てい
たと思われる。また「住んでいた」とある
が、これは実際に住んでいたというわけでは
なく、長年海に出ていたという意味である
と読み取れる。「太一も」とあることから、
太一も海に親しみがあったということがわかる。

子供のころから、太一はこういつてはばからなかった。

「こう」というのは前文の漁師になって、おとうといっしょに漁に出るということである。「子供のころから」とあるので、子供のころからずっとこの思いを持ち続けていたことが分かる。「言ってはばからない」というのは頑固な、強情なという意味であるので、心の中に自分の思いを抱き続けていたということが読み取れる。

空っぽの父の船が瀬で見つかり、仲間の漁師が引き潮を待ってもぐって



みると、父はロープを体に巻いたまま、水中で事切れていた。

「事切れていた」とは、息が絶える、死ぬという意味である。ゆえに父は水中で死んでいたということが分かる。この文の直後に「ロープのもう一方の先には、光る緑色の目をしたクエがいた」とあるので、クエを捕ろうとして奮闘していた時に亡くなったのだと思われる。父がロープを体に巻いたまま死んでいたのは、海に流されないようにロープを体に巻きつけていた、あるいはクエを捕まえることに奮闘している最中に巻きついてしまったのではないかと考えられる。

まるで岩のような魚だ。

「まるで」というのは「違いがわからないほどあるものやある状態に類似しているさま」である。ここでは瀬の主であるクエを何人がかりで引こうと全く動かなかったことから、魚を岩のように重いものであると感じたのだろう。

「ずいぶん魚をとってきたが、もう魚を海に自然に遊ばせてやりたくなくなるとる。」

「魚を海に自然に遊ばせてやりたくなくなるとる」とは魚をとるのをやめる、つまり漁師をやめるということになる。与吉じいさは、年をとって自分の体力が衰えたので漁師をやめると太一に言うことで、自分のでしになることをあきらめさせているのだと読み取れる。

こうして太一は、無理やり与吉じいさのでしになったのだ。

「無理やり」とあるので、与吉じいさは太一が自分のでしになることに最初は反対していたということが読み取れる。しかし、太一の漁

師になりたいという強い思いからでしになることを承諾したのではないかと考えられる。

与吉じいさは、瀬に着くや、小イワシをつり針にかけて水に投げる。

この一文は、与吉じいさが漁を行う際の行動を表している。「瀬に着くや」という言葉の後ろには「否や」という言葉が省略されている。「やいなや」という接続詞は、「くするとすぐに」という意味を表す。与吉じいさは瀬に着くとすぐに、つり針にエサとなる小イワシをかけ、漁にとりかかるのである。「小イワシ」とは、正確に言うとかタクチイワシのことである。カタクチイワシは、ニシン目カタクチイワシ科に分類される魚の一種であり、成魚でも十センチメートル程にしかないために「小イワシ」と呼ばれることがある。

それから、ゆつくりと糸をたどっていくと、ぬれた金色の光をはね返して、五十センチもあるタイが上がってきた。

前文における与吉じいさの続きの行動を表すものであり、エサを仕掛けてから魚を釣り上げるまでの様子が描かれている。「ゆつくり」という言葉から、糸の動きや張り具合、水面の様子などをうかがいながら糸をたどる、与吉じいさの様子が想像できる。「ぬれた金色の光」とは、水面で反射している太陽の光であると考えられる。太陽の光を受け、きらきらと輝く水面をかき分け、タイは釣り上げられたのであろう。わずか十センチ程度のエサで、五十センチものタイを釣り上げており、このことから与吉じいさの漁師としての技量を読み取ることができ

「おかげさまでぼくも海で生きられます。」

太一は父を早くに亡くしたため、漁師としての技術を与吉じいさから教わった。今まで自分を見守り、育ててくれた与吉じいさを思い「おかげさまで」と言っている。「ぼくも」に含まれるのは、自分はもちろん、与吉じいさや自らの父、そのずっと先の顔も知らない先祖たちであると考ええる。「海で生きられる」という言葉は二つの捉え方をすることができる。一つ目は経済的な成長であり、魚などを捕まえ海からの恵みを受けて生活していくことができるぐらい、漁師としての技量を身につけたというものである。二つ目は精神的に成長をし、先代の漁師たちに恥ずかしくないほど漁師として立派になり、海と共に一生を送る覚悟ができたというものである。考察者としては、後者の意味合いが強いと考える。

ここで与吉じいさは、太一の祖父であるのかどうかについて考える。考察者は与吉じいさは、太一の祖父ではなく近所に住むおじいさんであると考ええる。本文中の記述から、三つの理由が考えられる。一つ目は「父もその父も」という言葉から、もし与吉じいさが祖父であった場合「父も与吉じいさも」と具体的な呼び名を書くのではないかということがある。二つ目は、太一の父はもぐり漁師であったのに対し、与吉じいさの漁の仕方は一本釣りであったことである。親子で漁の仕方が異なるというのは、漁を行うための技や船を引き継いでいくことから考えると、三つ目は与吉じいさが、太一とその母と一緒に住んでいないことである。「船に乗らなくなった与吉じいさの家に、太一は漁から帰ると毎日魚を届けに行った」とあり、もし与吉じいさが祖父であるならば、太一の母は父にあたる与吉じいさと一緒に家に住み、食事や身の回りの世話にあたるのではないかと考える。以上に挙げた

三つの理由から、与吉じいさは太一の祖父ではないと考える。

悲しみがふき上がってきたが、今の太一は自然な気持ちで顔の前に両手を合わせる事ができた。

「ふき上がってきた」という言葉は、「こみ上げてきた」よりもスピード感があり、与吉の死に対して、一気に胸の奥から“悲しい”という感情が強く表れてきたことが分かる。「が」という逆接が用いられており、次に続く言葉は、一般的に「悲しみがふき上がってきた」時とは異なる行動をとると考えられる。「顔の前に両手を合わせる」という表現は、合掌を表しているのだろう。「合掌を行った」とあるよりも、より太一の動作が目に見えかぶ。この「顔の前に手を合わせる」行為には、漁師として自分を育ててくれた与吉じいさへの感謝の気持ちと、じいさの冥福を祈る思いがあると考える。

父がそうであったように、与吉じいさも海に帰っていったのだ。

太一は与吉じいさの死を「海へ帰った」と表現している。「帰る」という表現から、太一は与吉じいさも父も、この世からいなくなったのではなく、海へ帰っていったと捉えている。「父もそうであったように」とあることから、父や与吉じいさも含め、この海で漁師として生きる者は皆、最後には海へと帰っていくと太一は捉えていると考える。

「おまえが、おとうの死んだ瀬にもぐると、いつ言いだすかと思うと、わたしはおそろしくて夜もねむれないよ。」

太一は父やじいさの死を「海に帰った」としているが、母は「おとうが死んだ」と表現している。このことから父の死に対する思いや悲

しみ、捉え方は母と太一では全く同じではないと考える。母は、太一が父の死んだ瀬にもぐることをおそれ、できればそうしてほしくない願う一方で、いつかそのような日が来るのではないかという思いも抱えている。「おそろしく」とは、太一も父と同じように死んでしまうのではないかという、太一の死に対するおそれであると予想する。

太一は、そのたくましい背中に、母の悲しみさえも背負おうとしていたのである。

「その」という指示語は、前文中の「あらしさえも跳ね返す屈強な」という表現を指すのだろう。「たくましい背中」という言葉から、鍛えられた身体や筋肉、また漁師としての多くの経験値を今の太一は持っているという印象を受ける。長年、漁を行ってきたことにより、身体的、技術的、そして精神的にも立派に成長したことが分かる。「母の悲しみ」とは、おとうの死に対するものである。「さえも」とあることから、父を亡くした自分の悲しみに加えて、夫を亡くした母の悲しみも背負おうとしていることが分かる。また、「さえ」という言葉は、父の死を取り巻くすべての悲しみを太一が背負おうとしていることを表し、その最も極端な例として「母の悲しみ」が挙げられている。

はだに水の感しよくがこちよ。

「はだに」水を感じていることから、太一はウェットスーツを着用していないか、肌の露出の多いものを着用していることが予想される。また、「水の感しよくがこちよ」を感じるのは、水温が比較的高いときである。また、二文前に出てくるイサキは夏の魚である上に、直後の文の「海中に棒になつてさしこんだ光」の描写から南中高度が高い

ことがわかる。よってこのとき、季節は夏であったと推測する。

耳には何も聞こえなかったが、太一はそう大な音楽を聞いているような気分になった。

「耳には何も聞こえなかった」から、このとき太一の聴覚は機能していない。それにもかかわらず、太一は「そう大な音楽を聞いているような気分」になっている。これより、太一は視覚と感しよくによって得られる情報から、海の雄大さを感じ、包み込まれるような心地よさを味わっていることがわかる。

とうとう父の海にやつてきたのだ。

「父の海」とは、父が死んだ海のことである。「とうとう」とあるので、太一がこの海に至るまでに、いろいろな過程を経たことがわかる。また、「きた」ではなく「やつてきた」と表現することで、その場所に特別な思いを抱き、到達することを待ち焦がれていたことが読み取れる。「だ」には、事実を断定するはたらきがある。

はげしい潮の流れに守られるようにして生きている二十キロぐらいのクエも見かけた。

「はげしい潮の流れ」にも関わらずそれに「守られるように」生きている」という表現に違和感を覚えるが、クエにとつての敵は自分を捕らえようとする人間であり、はげしい潮の流れはむしろ味方であるのだろう。「クエも」とあることから、太一はクエの他にも海の生物に出会っている。「見かけた」からは、太一が見ようとして見たわけではなく、たまたま目に入った程度であることが伝わってくる。

海底の砂にもりをさして場所を見失わないようにしてから、太一は銀色にゆれる水面にうかんでいった。

「海底の砂にもりをさして場所を見失わないように」する行為から、海底の景色は一樣であり、目印がなければ同じ場所へ戻ることが困難であることが予想される。「銀色にゆれる水面」とは、波の立つ海面が太陽に照らされ、反射して輝いている様子を描写したものである。その水面に向かって「うかんでい」という表現をしていることから、太一は水中にいることによって生じる浮力に身を任せて、海面へ向かったと考えられる。

息を吸つてもどると、同じ所に同じ青い目がある。

「同じ所に同じ青い目がある」という表現から、クエは太一が息継ぎをして戻ってくる間、微動だにしなければよかったことが読み取れる。目は口ほどに物を言うという慣用句があるように、青い「目」の描写を入れることによって、クエの落ち着き払っている様子を暗に匂わせているのではないかと考えた。

魚がえらを動かすたび、水が動くのが分かった。

「魚がえらを動かす」のは、呼吸するために口から取り入れた水を体外に放出するときである。クエのえらから放出された水の量、勢いが凄まじかったために、「水が動くのが分かった」のだと推測する。また、「えらを動かすたび」に水が動くのであるから、その呼吸は常であり、クエは相当な大きさであることがわかる。

興奮しながら、太一は冷静だった。

「興奮しながら」から、父が死んだ海で父と出会っていたであろうクエを発見したことに、胸が高鳴っていることがわかる。また、「冷静だった」とあるので、クエに出会って興奮はしているが、その状況をしっかりと把握できていることがわかる。なお、読点を挟んで対照的な太一の様子が描写されているが、日本語の特性として後から述べた内容に重きが置かれることを考えると、太一の心情としては後者の「冷静さ」の方が勝っていると考えられる。

これが自分の追い求めてきたまぼろしの魚、村一番のもぐり漁師だった父を破った瀬の主なのかもしれない。

「これが」とは、太一が見た百五十キロは優にこえているであろうと思われる魚のことを指している。文末が「なのかもしれない」とあることから、自分が見た魚が父を破った瀬の主であるということに確信があるわけではないということが分かる。

水の中で太一はふっとほほえみ、口から銀のあぶくを出した。

「ふっと」という言葉には、「瞬間的に」ということを表す時間的な意味と、「フツツと笑う」「くすつと微笑む」などの笑い方を表す意味との二つのとらえ方ができる。「ほほえみ」から、くしゃつとした笑顔を見せたのではなく、軽く口角をあげる程度に笑ったことが予想される。「あぶくを出した」とあるので、あぶくが自然に出たのではなく、意図的に出したと読み取れる。「銀の」という言葉は、あぶくにかかる修飾語であり、太陽の光が水に反射し、キラキラ輝いている様子がわかる。

もりの刃先を足のほうにだけ、クエに向かつてもう一度笑顔を作った。

「もりの刃先を足のほうにだけ」から、もりはクエには刺さっておらず、クエに向けていた刃先を自分の足元へおろしたということが分かる。クエに刃先を向けていたのはクエを脅かすためであり、戦意喪失していたと考えられる。「もう一度笑顔をつくった」とあるが、一回目は前文の「ふっとほほえみ」の笑顔である。これは自分の中で消化する笑顔であり、だれかに見せるための笑顔ではない。これに対して「もう一度作った笑顔」は、「クエに向かつて」とあるので、クエに見せようとして作った笑顔だと考えられる。また、この笑顔は意図的につくったものであり、瀬の主がおとうだと分かったということを示すためにつくった笑顔なのではないかとも考えられる。

こう思うことによつて、太一は瀬の主を殺さないですんだのだ。

「こう」とはクエがおとうであることである。「よつて」は前の文に述べたことを理由や根拠とする意を表す語である。太一が「瀬の主を殺さな」かったのは、目の前のクエを父親と重ねたためであることがわかる。また、殺さないで「すんだ」としていることから、太一は目の前のクエを殺さなければならぬという義務感から解放され、気持ちの上で満足することができたことが読み取れる。

千びきに一びきしかとらないのだから、海のいのちは全く変わらない。

「千びきに一びきしかとらない」のは、与吉じいさの教えである。与吉じいさは、こうすることですつとこの海で生きていけると言った。海で生きる太一は、この教えに従い、海のいのちを大事に守っている

ことがわかる。「だから」は前件が後件の原因・理由になることを表す接続語である。ここでは、「海のいのちは全く変わらない」理由が「千びきに一びきしかとらない」であることを示している。「海のいのちは全く変わらない」とは、太一の行為が海のなかの生命の循環に、何ら影響を与えていないということである。

三 考察

(一) なぜクエという魚が取り上げられたのか？

これは、主にクエの生態に関係していると考えた。クエは外洋に面した浅い、岩礁やサンゴ礁に生息し、群れをつくらずいつも単独で行動する。また、体長は一メートルを優に超えるものもいる大型の魚である。クエは自分の住処からはほとんど離れず、遠出をすることもないという。私はここが、この物語で太一の探し求める魚がクエでなければならなかったポイントであると考えた。太一が、父の亡くなった浅瀬に潜る場面がある。そこで太一が海底に潜む巨大なクエに出会い、「おとう、ここにおられたのですか。…」という発言をしたことによつて、私たちは、そのクエ(太一が父親だと思う)が、長い年月の間、浅瀬でじつと太一を見守っていたことに気付く。ここで、もし、マグロやスズキなどの回遊魚が取り上げられていたのであれば、私たちはこの考えにたどり着くことはできない。

(二) この物語がなぜ小学校の教材になっているか？

この問題は、海のいのちで一番何を伝えたいのかということに関係している。正直なところ、小学校の頃この物語を初めて読んだ時

たい何が言いたいかさっぱりわからなかった。テーマがはっきりしている他の教材と比べると、曖昧な印象を受ける作品である。しかし、今回改めてこの物語について考えたとき、作者がこの作品に込めた思いを感じることもあった。それは「自然と人間の共生」である。物語の中では、父親の死、与吉じいさの死が太一にふりかかる。特に太一の父親の命は、海(自然)との闘いの中で失われる。しかし、太一は海(自然)を恨むことはしない。二人は海に帰っていったのだと捉え、死を「自然」の中で起こる当たり前のことであると考える。そして、自分自身も海とともに生きていこうと決意する。人間の力の及ばないもの(自然)と太一(人間)がお互いに受け入れつつともに存在していくことを、この物語は描いているのではないか。

また、小学校学習指導要領解説の最後に、「道徳の内容」の学年段階の一覧表がある。小学校第五学年及び第六学年の目標の中に、「生命のかけがえのなさを知る」「自然の偉大さを知る」「人間の力を超えたものに対する畏敬の念を持つ」などがあり、この物語の主題と通じているものが多いと考えられる。

